

「開かれた国有林」を目指 したイベントへの取り組み

下北森林管理署脇野沢事務所 ○管理官 田中 隆博
会計係 柳谷 広貴
総務係 葛西 伸彦

1 はじめに

(1) 社会的情勢

今日の先進諸国における環境への意識は著しく強い。これは、環境汚染が国境を越えた問題であり、汚染への危機感が世界的に広がりつつある背景があるためである。

森林を取り巻く問題も地球温暖化問題から水質汚濁の問題まで様々な方面からの関心を集めており、その保護活動も次第に盛り上がってきている。

また近年、余暇時間の増大により人々に生まれた「ゆとり」の中で、それまでの自然に対する木質資源としての価値に加え観光資源としても位置づけられ、新たな観光産業を形成しつつある。

(2) 地域的情勢

当所の所在する脇野沢村は下北半島の西南端に位置し、「脇野沢の鱈」で知られる人口3千人弱の漁業の村である。

また、近年村では観光にも力を入れている。最近農作物を荒らす害獣としてマスコミに取り上げられるサルは、野生ザルの北限としても知られ、観光資源の一角を担っている。しかし、近年の多様化するニーズの中で一自治体のわずかな観光資源では集客が困難になってきており、各地で市町村の連携による観光ルートづくりが進められ、下北においても広域行政による観光への取り組みが始まろうとしている。

(3) 国有林情勢

国有林は実質的には今年度から、「木材生産機能重視」から「公益的機能重視」へと方向転換し、新たなスタートを切った。公益的機能という人々の生活に密接なテーマを掲げることで、これからの国有林野職員には国民とのより深い関わりが求められている。

これらの情勢を背景に林野行政は、国土と環境の保全を第一とする行政として国民に委ねられ、また、注目を集めていくと考える。そこでいかに行政としての役割を国民に伝え、そして協力を得ていくかということが国有林が今後抱えていく課題の一つでもある。

また、国有林独自の景観や保健機能を様々な形で国民へ還元することもこれからの国有林に重要なことではないかと考える。

国有林行政の最下層としての森林管理署等において、地域住民とどうコミュニケーションをとっていくべきなのか。当所でこれまで取り組んできた「地域住民とのふれ合いの場」、

「森林づくりのフィールド」としての国有林の一例を挙げ、「開かれた国有林」を目指した取り組みについて考察する。

2 具体的な取り組み

当所では、地域住民とのふれ合いの場として、幾つかのイベントを実施している。その1つは昨年の業務研究発表で紹介した「与作選手権大会」の開催であるが、今回は実際に森林を活用したイベントを紹介する。

(1) 森林浴ウォーク大会

当所と脇野沢村観光協会で開催するこのイベントは、脇野沢の自然を活かし、住民の健康と豊かな心を育むと共に村の観光や産業の振興を目的として、毎年10月中旬に開催され、今年で12回目を数える。また、この大会には農協、漁協、商工会、リフレッシュセンター「鱈の里」が協賛し、後援として商工会青年部・婦人部、教育委員会、青年団、漁協青年部、県信用脇野沢支店、郵便局、ライオンズクラブ、老人クラブが参加しており、各団体から数名の代表者により実行委員会を設立して運営し、村をあげてのイベントの一つとして定着してきている。

ここで第12回森林浴ウォーク大会の概要を説明する。

期日は10月24日(日)、源藤城国有林内のヒバ人工指標林を森林浴会場に、青森ヒバのPRを兼ねて開催した。

当初80名前後だった参加者も年々増加し、最近では150名を越える市民が参加している。また、客層も地元の家族連れから、むつ市、遠くは弘前市などからも参加しており、今年には三沢米軍基地からアメリカ人の家族連れも参加するなど、地域的にも広がりを見せている。

森林浴は参加者を3班に分け、各班に当所職員を2名ずつ配置して、先導をしながらポイント毎に解説をした。また、会場をヒバ人工林としたことにより、ヒバ林の森林浴としての効能などに併せて、ヒバ材の特徴や価格などの説明を行いPRを図った。

そのあと、同国有林内にて記念植樹をして、第2会場である道の駅「鱈の里」へと移動した。

第2会場では漁協や農協、商工会などによりホタテの帆焼きや豚汁、おにぎりなどが振る舞われ、同時に当所で企画した、森林浴ウォークで解説した樹木を当てる「樹木当てラリー」や、木工教室を行った。木工教室では鳥の巣箱づくりにたくさんの家族が参加し、慣れない手つきで金槌をふるう子供たちに職員が丁寧に指導した。

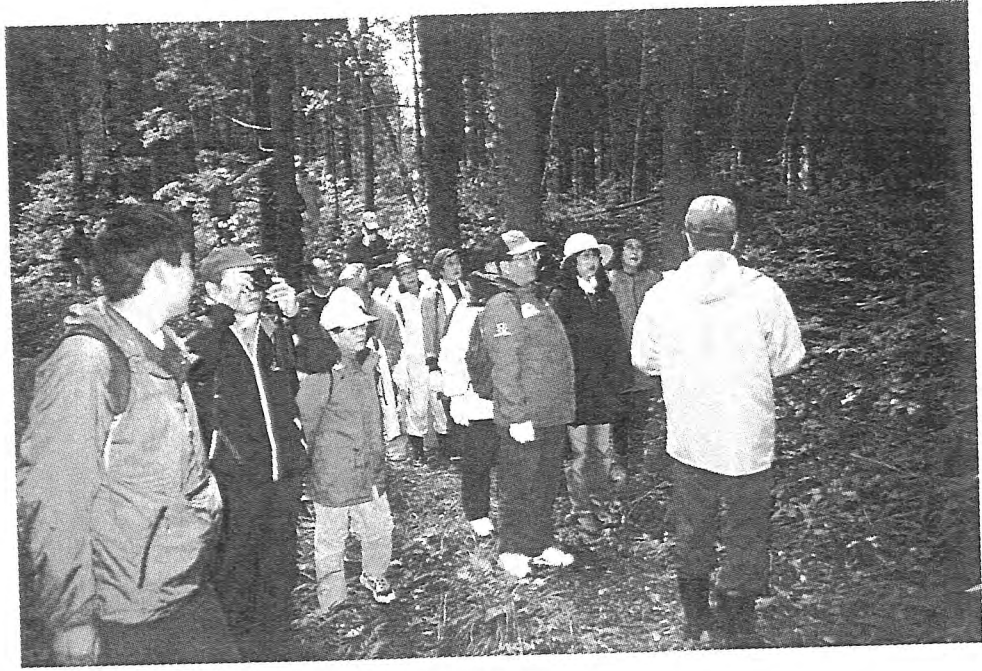
そして、その場で閉会式を行い、参加の記念として当所でナラ材のメダルから作成した完歩証を手渡し解散した。



写-1 森林浴ウォーク大会開会式



写-2 森林浴会場のヒバ林



写-3 森林浴風景その1



写-4 森林浴風景その2



写-5 記念植樹



写-6 木工教室

(2) 植樹祭(切り払い祭)

当所では村と共催する植樹祭のほかに、地域集落主催の植樹祭や連合脇野沢地区協議会主催の植樹祭(切り払い祭)に対し、森林づくりのフィールドとして積極的に国有林を提供しているが、今回は特に連合脇野沢地区協議会主催の切り払い祭について取り上げ紹介する。

この祭典は連合脇野沢地区協議会が、山野を守り、育て、森林と人が共生できる社会実現のために体験を通して緑の大切さを習得することを目的に、脇野沢事務所並びに村及び子供会や婦人会等諸団体の協力のもとに開催しているもので、今年で7回目となる。これまで5回の植樹祭を実施してきたが、これら植樹地の生育環境が雑木や雑草の繁茂によって悪化してきていることから、第6回目の前回からは植樹祭に代えて以前の植樹地で切り払い祭を実施しており、また事務所としても作業に参加してきているところである。参加者は毎回婦人会や子供会などの各種団体等も合わせて約70名程度あるが、今回は切り払い祭ということで規模を縮小し30名程度が参加して下刈り鎌を手に汗を流した。そして、その後の懇親会にも参加することで地域住民の生の声を聞くことができた。



写-7 刈り払い祭風景

3 考察

これらのイベントを通してまず第一に感じたことは、参加者の森林に対する認識の違いである。様々な情報が飛び交う現代において森林に対する知識に差があるのは当然としても我々の常識と民間人との常識に大きな開きがあり、誤解も多い。また、森林浴ウォークの参加者の中にはホタテやイカの網焼きが目当てで、森林に対してあまり興味がないという人もいる。昨年の「与作選手権大会」のアンケートの中で「営林署の業務について」知っているかという問いに対して、「あまり知らない」「全く知らない」と答えた人も多数見受けられた。脇野沢のような小さな村でも、実際に接したことがない人にとっては国有林は不透明な存在であり、興味の少ない職場であると感じられた。

しかし、これらの人達とイベントを通して実際に接し、また共に森林と接することで、お互いに距離を縮めることができたと確信している。

また、外部の団体とイベントを共催することによって、森林に興味のない人と接する機会が生まれることや、人的、資金的な制約をクリアできるなどのメリットと共に、各種団体に対しても観光振興への寄与や、活動に対する人的、空間的なバックアップなど、よりよい協調関係を保つことができている。

これからの観光はソフト面の充実が重要といわれるが、村のソフト事業等に対し、ソフトとハード両面からの支援を今後とも続けていく必要があると考える。

そして、このような協調関係や、国民との対話などによって国有林への興味を持つきっかけを作ることが国有林の不透明感を払拭し、わかりやすい行政、国有林へと変革するうえでの重要なプロセスであると思われる。

今後地域住民に対し、正確な情報を提供する場、またはコミュニケーションの場としてこのようなイベントをさらに盛り上げることで「国民の森林」として、「開かれた国有林」をすそ野からアピールしていくことも重要であると考えられる。

また、切り払い祭というイベントは、これまでの植えるだけの植樹祭に育成という面を加え一貫性を持たせることで、より森林に対する住民の認識を深めることができる大変意義あるものであり、今後とも積極的なフィールドの提供が必要であると考えられる。

4 今後の課題

これらイベントの反省点として、私も含め職員の参加者との接し方が不慣れなことが挙げられる。これは当所に若い職員が多いためであるが、今後親しみある「お役所」を目指し、より多くのイベントで経験を積んでいきたい。

また、組織機構の縮小に伴いイベントの衰退が危惧される場所である。今後関係団体を交えながら、イベントを継続させるうえでの方策について模索していきたい。